

場所論再考

—他者化を越えた地誌のための覚書—

熊谷 圭知

I はじめに

わたしは、地理学とは、究極のところ場所の生成とその理解をめぐる研究だと考えている。場所とは、常に個別具体的なものでしかない。しかし、場所の中には、差異や多様性と同時に、共通性や相同性、言い換えれば普遍が存在する。わたしがフィールドとするクラインビット村、ブラックウォーターという場所の物語は、パプアニューギニアという固有の地域の文脈を離れては存在しえない。しかしクラインビットという場所の生成の物語は、空間を越えた他の場所の生成の物語と共通性・相同性をもっている。

わたしが描きたいのは、こうした個別の中にある普遍であり、また個別の中にも普遍があるということである。地理学の特長は、「地に足の着いた」学問であることだ。しばしばその方法・視点において人文地理学と対照される社会学が、具体的な場所や空間を離れても抽象的に論じられうるのに対し、地理学は常に個別の場所や空間を参照しようとする。たとえば社会学においては、「…についての研究—X県Y町の場合」という論文のタイトルが存在しうる。それは社会学の第一義的な目的が、社会関係や社会構造の解明にあり、個々の場所はそのための素材を提供する事例にすぎないからだろう。しかし、地理学においては、そのような仮名の場所例示は基本的に成り立たない。論文における地図の提示が恒例であることに表されるように、そこでは常に個別具体的な場所が指示され、参照される。その個別具体性から遊離しては、地理学は存在しえないといってもよい。そしてわたしは、その点において地理学に可能性を見る。

わたしたちは、新しい場所を訪れたとき、そこに自らの日常生活世界とは異なる風景や論理を見出し、それに惹かれたり反発したりする。それと同時に、自らが既知なものや慣れ親しんだものを見出し、それに安心したり幻滅したりもする。場所の論理とは、個別具体的な存在である場所の中に、差異や多様性と同時に、共通性と相同性をも見出す論理である。それは、観念的なものというよりは、むしろわたしたちが日常を生きる上で必要と

される実践的なものといってもよい。具体的な場所にこだわるとともに、それを他の場所と比較し、その差異と共通性の中に論理を見出そうとする。それは思想としての地理学であると同時に、また日常生活実践としての地理学でもある。その個別性と普遍性の共存こそが、場所と場所の生成の特質でもある。

地誌とは、場所あるいは地域の物語である。言い換えれば、地誌とは場所や地域の個性を描くものである。地誌が描かれるとき、地域の固有性や種別性が重視されるのは、それゆえである。しかしそこには問題が潜んでいる。遠く離れた場所と人々（とりわけいわゆる「南」の世界）が取り上げられるとき、それはしばしば他所の面白おかしい、あるいは不運で悲惨な—マスメディアでの表象の仕方はたいていこのどちらかに偏る—物語になる。それは自分たちとは無縁な風景や出来事として了解され、消費されてしまうということだ。そこから「日本人に生まれてよかった」という安易な自己肯定に落ち着く。他所の（他者の）物語が、自らの認識論や価値の枠組みを揺るがすことはない。

人は自己が何者かを認識するために、他者の存在を必要とする。他者との比較や対照の上に、はじめて自己が構築される。しかし、それはしばしば自己を安定化するために、他者に変わらぬ役割を求めてしまうことにもつながる。自己を構築するために、他者を自らとは異なる—しばしば自らより劣位にある—変わらぬものとしてまなざすこと、それが「他者化」にほかならない。地誌には常に他者化の畏が存在する。それは、場所や地域の固有性を描くことを通じて、異なる場所や人々が、自らとは異なる、縁を持たない変わらぬ他者としてまなざされてしまうことである。

グローバル化時代の現在、アフリカであれ、ニューギニアの奥地であれ、世界の動向と無縁に存在している人はいない。国際貿易や具体的な商品を通じて、あるいはメディアの報道を通じて、南の世界の人々が日常を生きる場所は、北の世界の人々の場所とつながっている。そのつながりを具体的に描くことは一容易ではないが一他

者化を越えた地誌のための有効な方法だろう。

もう一つの方法は、場所の観念を通じて、日常生活世界を描くことである。遠く離れた世界の人々の場所とその生成は、わたしたちの場所および場所の生成と、差異とともに様々な共通性・相同性を持っている。そのようなものとして場所と人々の日常生活の実践を描くことで、聞き手や読み手にその地理的理想力を喚起し、相互理解の回路を提供することができる。他者の場所を理解するにあたって、「他者化」の方向に向かうのではなく、その場所や人々とつながりたいという動機づけを与えること、それがグローバル化する現代における地誌の仕事であろう。本稿は、異なる世界の人々を単に分析し、分断するのではなく、協働し、つながっていくための地誌作成に向けての覚書である。

II グローバル化と「場所」

グローバル化と空間の均質化が進行する現代、それとは対照的に「場所」とその復権をめぐるさまざまな議論が喚起されている。なぜ場所が注目されるのか。そこには様々な背景がある。

第1に、グローバル化の中で流動化する日常世界における不安の増大、その中で安定したよりどころを求めたいという欲求である。第2に、分断され、個人化される社会の中で、共同性とその基盤となる空間が求められていることがある。第3に、国境を越えた市場経済化の進行の中で、小商品生産様式とそれに基づく地域社会が危機に瀕していることである。第4に、その一方で、(大量生産から多品種少量生産に移行した)ポストフォードイズムの時代には、画一的ではない差異に敏感な商品やサービスが求められ、その中で場所(例えば産地や生産者商標に示されるような)が重要な付加価値を与えている。第5に、商品やサービス自体だけでなく消費が実現される空間においても差別化・差異化が図られ、顧客を集めるための居心地の良い場所づくりがますます重要となる。

これらの諸点は相互に関連している。グローバル化にともなう資本、物、人、情報の国境を越えた流通と相互依存の急速な増大は、これまで以上に人々に自らの生活空間と意思決定の力を越えたところで物事が決まり、またそれに(本意にも)影響を受けざるを得ないという思いを抱かせる。それに対する苛立ちや不安はしばしば、自らの空間を安定的で同質的なものとして再構築しようとする「他者」の排除を含む実践を生み出す(安田2012)。ポストフォードイズム体制の下でのフレキシブルな生産は、企業を雇用の流動化へと向かわせる。非正規雇用が常態化し、労働者は分断される。かつての企業内労働組

合に守られた労働者の権利も侵食されるが、非正規雇用现就若年代の多くは、そのような最低限の権利にも与れず、著しい世代間格差をもたらす(熊沢2007)。「働かない」で「高給」を得る公務員へのバッシングは、その不満のはけ口として利用され、さらなる規制緩和と労働条件の低水準での均衡化が図られることになる。

非正規雇用が同一労働・同一賃金の原則に基づくなら、「フリーター」という呼び方に当初表象されていたようにそれは組織に縛られない自由な生き方を可能にするものかもしれない。しかし現実はそのようではない。セーフティネットを欠いた働き方の変化が、ネオリベリズムの原理の下で、自己責任の名の下に個人に強要される。正規雇用と非正規雇用の間には、結婚して家族を持つ可能性にも大きな落差がある(藤森2010)。教育課程、企業福祉、家族福祉、公的福祉、そして自分自身からの5重の排除が負のスパイラルを増幅する(湯浅2007)。問題なのは、非正規雇用の若者たちの多くが、自らの労働とそれに伴う関係性を蓄積して自己の資源としていくような人間として他者と向き合い協働していくような機会と場所を奪われていることである(武田2009)。

人びとが生産者として減価されることと表裏一体の関係をなすのが、消費者としての選択肢の多様化にもとづく見せかけの豊かさである。24時間営業のコンビニエンスストアの在庫管理に象徴されるような消費者の嗜好(必ずしも「ニーズ」ではない)への同調を支えるのは、深夜労働を含む過酷な労働管理であり、低賃金の非正規雇用の構造化である。24時間営業のマクドナルドを一杯のコーヒーでねぐらの場所とするホームレスの青年たちと、そこでマニュアル通りの笑顔で客を迎える管理された感情労働(ホックシールド2000)を実践するアルバイトの若い女性たちは、地続きである。

消費者の利便性が追求されるのは、そこに利潤が生み出される限りにおいてであり、人口密度が高く購買力を持つ大都市と、地方都市、農村、周縁化された「過疎」地域の間には落差が生じる。自家用車をもたず、大型ショッピングセンターを簡単に利用できない地方の高齢者にとっては、公共交通の弱体化と商店街の衰退に伴って消費の機会は減衰していく。そこには対面関係に基づく消費から、非人格化された消費への移行による、「場所」の喪失が重なり合っている。

いわゆる「南」(Global South)の社会に目を転じれば、グローバル資本主義の浸透がもたらす負の結果がより先鋭的に現れている。1980年代以降の世界銀行やIMFの構造調整政策による市場経済、民営化の強要は、もともと脆弱な公的サービスを低下させ、サハラ以南アフリカ

をはじめとする多くの「最貧国」に様々な困難を強いている。一方で、先進諸国による開発援助のもたらす結果についても、多くの批判が存在する(モヨ2010)。そこには新植民地主義的構造が横たわる。途上国の貧困を数値目標を挙げて改善しようとするミレニアム開発目標は、こうした構造的格差の根源を何ら問うていない。

先進国が理念やルールを決め途上国に従わせる(そして一方的に「恩恵」を与えようとする)こうした構造は、現在にはじまったことではない。第二次世界大戦後の西欧の「開発」言説は、「南」の世界を「低開発国」として措定してきた。その嚆矢をなしたのは、1949年のトルーマンのアメリカ大統領就任演説だが、そこには第二次世界大戦後のアメリカ合衆国の国際政治における覇権の獲得という意図が存在した。「開発途上国」に、「開発」プロジェクトを移入するという図式は、先進諸国が政治経済・知を含む世界秩序の担い手であることを際立たせる。それは「南」の人々の固有の(ローカルな)システム(文化、生態系…)の価値を奪い、その自律性を掘り崩すことと一対のものである(エステバ1996)。

こうした開発言説への根源的な批判は、ポスト(脱)開発論の論者たちによって展開されている(ザックス1996; Escobar 1995)。彼らが主張するのは「開発」が、経済社会の出現と経済価値への一元化(生産力の増大と成長)を支えるイデオロギーであることだ。したがって「開発」を前提とした「援助」は、たとえ自助のための援助であっても、援助される側の開発の欠陥を前提としており、与える側と与えられる側の間に必然的に権力関係をもたらす(グロネマイヤー1996:100-1)。

こうした先進国=経済社会中心主義的な構造の支配から抜け出すためには、市場交換の原理に基づく「経済人」(功利主義的=経済合理的な価値判断をする個人)という人間像/世界観の脱構築が求められる。そのためのオルタナティブとしてポスト開発論者たちが提示するのは、社会的相互作用にもとづく「コモンズ」(共有地、共有資源、共同体)の復権である(エステバ1996)¹⁾。そこにはロマン主義的な印象もつきまとうものの、南の世界(とりわけラテンアメリカ)の周縁化された人々の社会運動という裏づけが存在する²⁾。また非人格された市場のみに媒介されるのではない、顔の見える人々の社会関係が構築される場所とその承認という課題が関わっている。グローバル資本主義の中での「連帯経済」(ハーシュマン2008)構築の試みは、そのひとつである。そこでは周縁化された小農民や都市スラムの住民たちの様々な運動やプロジェクトが紹介されている。

先進国の側からも、連帯経済やポスト開発を志向する

問題提起が行われている(西川潤・生活政策研究所2007)。その核となるのが、「脱成長」と「地域主義」(ローカリズム)である(ラトゥーシュ2010)。ラトゥーシュの書は、などマクロレベルの具体的な提案(エコロジカル・フットプリントやエネルギーの地域自給など)は目新しくはないが、成長経済から降りること(経済の縮減)、経済的なるものの社会性への再埋め込みがラディカルに主張されている。それを支えるのは、やはり都市・農村のローカルな空間で展開される様々な自主管理の非営利アソシエーションである。そこでは生活域に根ざした集合プロジェクトの存在と、アイデンティティを承認する空間(場所)の存在が重要となる。こうした北側諸国における「脱成長」が、南側諸国でのオルタナティブ実現の条件である³⁾。

ラトゥーシュの書の紹介者である中野佳裕の詳細な解説(中野2010)にもあるように、脱成長論は、日本で1970年代以降に展開された「地域主義」(玉野井芳郎ほか)や「内発的発展論」(鶴見和子、西川潤ほか)(鶴見・川田1989)と相同性をもつ。地域主義には、環境を外部化して不問に付してきた経済学への批判、経済学へのエコロジーの挿入などのアカデミックな理念の再構築(玉野井芳郎、槌田敦ら)、後の地域おこしの実践につながる議論(清成忠雄)など異質な要素が同居していた(玉野井ほか1978)。日本では、1980年代の村おこし、町おこしの運動を経て、1990年代以降は自治体と連携した(自)地域学が各地で流行する。水俣の吉本哲郎、仙台の結城登美男らの「地元学」は、これまでの補助金依存の地域開発からの脱却と地域住民の主体形成を、足元の生活の再発見と再評価(「ないものねだり」から「あるものさがしへ」)に求めようとする(吉本2008、結城2009)。地元学には、脱政治的で、体制順応的な側面もあるが、水俣病をめぐる分断された地域社会を再生した吉本の運動(「もやい直し」)に見られるように、具体的な場所における実践に裏打ちされた力と切実さを持っている。

グローバル化の中での抵抗の拠点としての「場所」形成への希求とその実践は、北と南、都市と農村を問わず、強まっている。そこには、葛藤や対立を生み出す個別の地域の文脈・多様性と同時に、共通性・相同性が必然的に存在する。こうした場所をめぐる現実を、差異と相同性の双方を視野に入れて描くことは、グローバル化の中の他者化を越えた地誌の可能性につながるだろう。

Ⅲ モダニティ、グローバリズムと場所

場所とグローバル化(グローバリズム)、近代化・モダニティ、をめぐる代表的な所論を検討してみよう。

周知のとおり、地理学の中で、「場所」をめぐる議論が新たに提起されたのは、1970年代以降、イー・フー・トゥアン(Yi Fu Tuan)やエドワード・レルフら、人間主義的地理学(humanistic geography)の研究においてだった。その代表的な書が、レルフの『場所の現象学—没場所性を越えて』(高野ほか訳)である。

レルフは人間の日常経験からなる「生きられた世界」として「場所」に注目する。人間にとって自らの場所を持つことは本質的に重要であり、人間であるとは、意味のある場所に満ちた世界で暮らすことである(レルフ1999:26)。人は誰でも場所に根付くことへの欲求を持っており、場所への親近感、場所に対する深い配慮とかかわりの感覚から生まれる(レルフ1999:101)。本物の場所のセンスとは、個人および共同社会の一員として内側において自分自身の場所に所属すること、そのことを特に考えることになしに知っているという感覚である(レルフ1999:165)。

しかし現代世界は「没場所的」になっている。「没場所性」(placeless-ness)とは、「個性的な場所の無造作な破壊と場所の意義に対するセンスの欠如がもたらす規格化された景観の形成」(レルフ1999:20)であり、場所がみな似通ったものとなり、場所の経験とそれによるアイデンティティが弱められてしまうこと(レルフ1999:208)を意味する。

グローバル化という言葉がまだ流通していなかった時代のレルフの議論には、内側性と外側性、本物性(真正性)(authenticity)対 偽物性といった二元論が目につき、場所を変わらぬものとして規定しようとする本質主義的態度が支配的である。もしその場所に強い帰属意識をもつ内部者だけが場所のアイデンティティを持ちうる とすれば、そこから「他者」(たとえば移民)は排除されてしまうことになる。サブトピア(郊外)の高層集合住宅団地への嫌悪には彼の中産階級的な嗜好性を感じるし、その住民の生活世界は探求されない。場所の本物性を保証するものが、大量生産・消費主義によらない暮らしだとすれば、先進資本主義諸国においてそのような日常が可能なのは裕福で特権的な階層だけかもしれない。こうした限界はあるが、レルフが提起した「場所」とその危機というテーマは、現代においても重要性を失っていない。

レルフの論に示唆を受けながら、グローバル化批判の図式を提示しているのが、社会学者のリッツアである。

『マクドナルド化する社会』で知られるリッツアは、近著『無のグローバル化』において、グローバル化を二つの類型に分類する。すなわち成長や帝国主義的支配を至

上命令とする諸主体(国家、企業、組織)によって推進される「グローバル化」(Globalization:=GrowthとGlobalizationを合成したリッツアの造語:訳書では「グロースバル化」と、「グローカル化」(グローバルとローカルの統合に重点を置く)である。リッツアは、「存在」(something)と「無」(nothing)、「場所」(place)と「非場所」(non-place)という対立軸を設定する。「無」とは、(クレジットカード、ファストフードレストラン、ショッピングモールのように)特有の実質的内容を相対的に欠いており、概して中央で構想され、管理される社会形態を指す(リッツア2005:4)。これに対し「存在」とは、(ローカルな工芸品のように)特有な実質的内容に富んでおり、概して現地で構想され、管理される社会形態である(リッツア2005:11)。両者は連続体をなすが、「グローバル化」は「無」を生産する強い志向性があり、「存在」はもっぱら「グローカル化」によって生み出される。「無」は、特有な内容を欠いているため、大量生産でき(資本が利潤を得やすく)他の地域に輸出(移行)しやすい。これに対し、「存在」はより複雑でローカルな場所と結びついているので、一般に高価で、限られた地域でしか流通しない。

ビックマックやディズニーのキャラクター商品のような「非モノ」(大量生産される企画された商品)は、「非-場所」(関係性と、歴史と、アイデンティティを欠いた空間)で、非ヒト(マニュアル化された個人であり、他人と人間的な交流をもたない人)が提供する非サービス(画一化され、自動化されたサービス)を通じて提供される傾向をもつ。このような「グローバル化」の侵食に抵抗するため、独自で、地元地域と結びついた、人間関係が豊かで、人々にアイデンティティの源となるような真正な場所の創出(リッツア2005:349)が提言される。リッツアは、「無」を悪として否定するものではないと述べるが、明らかに彼の問題意識は(レルフ同様)、グローバル化のなかで、「無」が「存在」を凌駕し駆逐しつつあることへの危機感にある。

レルフとともに、リッツアの議論に大きな影響を与えたのが、「非-場所」の観念を提示した、フランスの人類学者オジェである。オジェは、『非-場所—超近代性へのイントロダクション』(1995)の中で、「場所」(place)を、「関係的で、歴史的で、アイデンティティに関わる」ものとし、そのようなものを持たない空間を「非-場所」(non-place)と定義している(Auge1995:63)。

超近代性(supermodernity)を具現化した「非-場所」の典型として、旅行者が体験する空間がある(Auge1995:70)。高速道路から眺める風景は、運転者を場所に

深入りさせない。料金所をカードで通過し、空港でチェックインしそこではコンピュータを通じたアイデンティフィケーションと、潔白さ (innocent) だけが求められる一搭乗券を渡され、免税店を覗き、機内でくつろぐ時、旅行者は様々なしがらみや関係性から束の間解放されている。他者と同じコードに従い、同じメッセージを受け取り、同じ要請に応える。「非-場所」空間は、単一のアイデンティティや関係性を生み出さない。そこには孤独と外見だけが存在する (Auge1995:82-83)。

超近代の「非-場所」と対照されるのが、人類学者が研究対象としてきた「人類学的場所」(anthropological place) である。それは、具体的で象徴的に構築された空間であり、社会生活の移り変わりや矛盾を許さないが、そこに属する人々に自らの確固とした位置一どれほど質素でつつまじやかなものであったとしても一を与える。オジェは、人類学的場所をけっしてノスタルジックには描いていないし、超近代の「非-場所」に人々が魅力を感じることも指摘しており (Auge 1995: 96-7)、超近代における共同性を欠いた個人の「非-場所」への移行を必然として、冷めた目で見ている。

社会学者のギデンズの立場もこれに近い。ギデンズは、『近代化の帰結』(Giddens 1990) (邦訳『近代とはいかなる時代か?』1993) の中で、近代と前近代とを分けるのは「変動の速さ」と「変動の拡がり」だとしている。

ギデンズは、モダニティの持つこのダイナミズムが、時間と空間の分離によって生み出されたとする。前近代社会では、時間は季節の周期と結びついており、場所(何処で)と不可分だった。しかし近代社会は、時間を場所と分離し、(時計によって示される) 均一でからっぽな(empty)時間を作り出した。時間と空間の分離は、空間をからっぽなものにすること(emptying of space)でもある。からっぽな空間とは、場所から切り離された空間を意味する。ギデンズのいう場所は、地理的な場(locale)であり、社会活動を取り巻く物理的環境が地理的に位置づけられている。モダニティの出現は、目の前にいない他者との関係を作り出し、空間を無理やり場所から切り離していった。それにより、ロカールは、そこからまったく離れた社会的諸力の影響を受け、作られていくことになる。それにより、ロカールがもつ現場の優位性とは無関係に空間が表象され、異なる空間単位が相互に置き換え可能となるのである (Giddens 1990:17-20: 訳語は筆者)。

こうした時間と空間の分離は、社会活動を目の前の特定の脈路への「埋め込み」(embedding)から解き放ち、制度の時-空間的拡大を大幅に押し広げる。この「脱埋め込み」(disembedding)のメカニズムは、二つの要素によ

って推し進められる。一つは、象徴的通標としての「貨幣」の創造、もう一つは専門家システムへの「信頼」(trust)である。貨幣は時間的・空間的にかげ離れた行為者間の取引を可能にするものにほかならない。時間的・空間的にそこに居合わせない人との間の関係性を可能にする象徴的通標としての貨幣と専門家システムは、それらに対する人々の「信頼」に基づいている。「信頼」とは、所与の一連の結果や出来事に関して、人やシステムを頼りにすることができるという確信を意味する。それを通じて人々は、脱埋め込みメカニズムの結果として生まれる不安から逃れることができる。

ギデンズはグローバル化を、ポストモダンではなくモダニティのもつダイナミズムの必然的帰結としてみる。グローバル化とは、世界規模で社会関係が緊密化することであり、それによって遠く離れた地域(locality)同士が結びつき、ローカルな出来事が遠く離れたところで生じる事象によって形づくられたり、またその逆も生じる。モダニティは「場所を奪う」(displace)が、現代において親しみの感覚はローカルな場所の独自性によってよりも、遠く離れた事象がローカルな環境の中に場所を得ることによってもたらされる。たとえば、地元のショッピングモールが、どこにでもあるチェーンストアによって占められ、同じようなデザインであることに人びとが安らぎを覚えるように (Giddens 1990:140)。

カステルは、ギデンズ同様、空間的視点を強くもつ社会学者である。代表作といえる『都市問題』において、都市を労働力再生産のための集会的消費(collective consumption)を必要とする空間として読み解いたカステルの場所への態度は複合的である。カステル(1999)は、グローバル経済の特質を、資本、生産、経営管理、市場、労働、情報、科学技術が、国境を横断して組織されることにみる。情報科学技術の進歩は、生産と管理における柔軟性と脱中心化を促す。それによって形成されるのが、「フローの空間」(space of flows)である。フローの空間とは、現場性に依存することなくその目標を達成できるような、非対称的交換ネットワークによって編成された空間である。「所在の空間」(spaces of localities)から「フローの空間」への移行は、場所の消失ではなく、場所の意味がもっぱら交換ネットワークにおけるその位置によって規定されるようになることを意味する (カステル1999: 222)。

カステルは、グローバル経済の中での北と南の格差の増大に加え、ヨーロッパ都市などに見られる、富裕層の排他的住宅地と郊外の移民居住区といった都市空間の分断を指摘する。そうした中でフローの空間に対抗しよう

とする草の根的な(場所に根ざす)運動は、しばしば自己閉鎖的で局地的なアイデンティティに分断され、異なる文化・場所とのコミュニケーションを途絶させてしまう危険がある(カステル1999:274)。しかしすべてがフローの空間に移行するわけではない。生産・経営システムの論理は、フローのレベルで決定されるが、社会的再生産は、地域現場に固有なものであり続ける。したがって場所に基づいた労働の編成、育成のシステムが必要となる(カステル1999:276)。カステルが期待するのは、能動的な市民参加によるロカリティの再構築と、場所の空間の上に国際的ネットワークを再構築するような地方自治体の役割である(カステル1999:277)。

フーコーが言うように、現代世界においては、人々は外部からの明示的・強圧的な政治権力よりも、個人の生を内側から規定し自発的に従わせてしまうような生権力によって支配されている。そうした秩序原理を運営する、国家を越えた支配形態をネグリとハートは「帝国」と呼ぶ。帝国に抵抗する草の根の主体として構想されるのが、マルチチュード(群衆, 多数性, 多性)である。ネグリとハートは、グローバル・ネットワークの差異のない同質的な空間に対抗する根拠地として構想された「場所」には疑義を示す(ネグリ&ハート2003:66)。

彼らがマルチチュードと呼ぶ、多様で差異を持った移動性を持つ抵抗主体は、均質な共同体とは対立する存在である。(自律的移動を旨とする)マルチチュードは「(帝国)の非-場に新しい場所を確立するような特異性」(ネグリ&ハート2003:490)を持つ。自分自身の移動を管理する権利は、グローバルな市民権への本源的な要求である(ネグリ&ハート2003:497)。これに対し、局所的なものへの賞賛は、しばしば流通や混合への反対へと向かい、退行を生みファシズム的なものになる。しかしもし局所的なものを取り囲む壁を壊し、人種、宗教、民族性、国家、人民といった概念から切り離して、局所的なものを普遍的なものに直接に結びつけることができれば、その具体的普遍によってマルチチュードは場所から場所へと移動し、その場所を自らのものとする事ができる。ネグリ&ハートが評価するのは、このような「遊牧的移動と交雑の共有地としての」場所である(ネグリ&ハート2003:453)。

移動や非-場所を拠点とするマルチチュードの戦略は、もっぱら「北」の都市的世界において有効な戦略といえる。この対極にあるのが、南のローカルな世界でグローバルイズムに抵抗する「場所」を構築しようとする実践である。ポスト開発論の第一人者である人類学者のエスコバルは、『開発との遭遇』(Escobar 1995)で、グローバ

ルな開発言説の包括的な批判を行った。彼は近著『差異の領域』において、コロンビアの太平洋岸における「黒人」(アフリカ系住民)と先住民たちの抵抗運動を、場所、地域、領域を基軸に描きだしている。「場所」を問題にする理由の一つとしてエスコバルが挙げるのは、近年の地理学、人類学、経済学を含む学問分野の中では、場所が軽視され、移動、転地(displacement)や、旅や、離散(diaspora)にばかり焦点が当てられる傾向にあったことである(Escobar 2008:7)⁴⁾。

同書では、コロンビア太平洋岸地域の自然地理(熱帯林、マングローブ林、湿地、河川…)が詳しく紹介された後、植民地化以降の歴史が語られる。そこでは鉱山労働奴隷としてアフリカから連れて来られた「黒人」が、自由の身になり、集落を築き、先住民の農耕を学び通婚関係をもつことで、太平洋岸に、先住民と黒人の「伝統的な」生活様式が作り出されていく。アンデス高地の都市が白人の地域であるのと対照的に、熱帯林に覆われた湿度の高い低地は、遅れた「黒人」にふさわしい地域とみなされてきた。その未開の地に、開発プロジェクトと資本が侵入し、「伝統的」な生活の基盤を奪われる危機にさらされた先住民・黒人が、NGOなどと連携した抵抗運動の基盤としたのが自らの場所・地域の生態系とそれと結びつく知である。もともと奴隷としてやってきた「黒人」は、もちろんこの地域の土着の人々(ネイティブ)ではない。しかし、しかしグローバル化と暴力的な大資本による開発の進行の中で危機にさらされる自己の居住域を、生態系と結びついた固有の「領域」=場所として再主張することによって、抵抗の基盤を作り出そうとしている。これは戦略的本質主義の実践である。

現代世界の中で、外部から影響を受けず、昔からの土地に住み続け、伝統的な生活様式を維持している人々は存在しない。しかし国家や資本の圧倒的な力による包摂に抵抗しようとするとき、自らと場所や領域との根源的な結びつきを再構築し主張するマイノリティによる実践(戦略的本質主義)は、重要な意味をもつといえる。

IV 人文地理学における「場所」観念とその変遷

人文地理学における「場所」をめぐる議論とその変遷をあらためて振り返ってみよう。

レルフは、前述の書(『場所の現象学』)の目的を、「私たちの日常経験からなる生きられた世界についての地理学的現象である『場所』を探求することである」とする。しかし場所の定義はそれ以上与えられない。レルフは、場所のアイデンティティは、個人が場所に対して持つアイデンティティが相互主観的に結びつけられて

生み出されるとする(レルフ1999:120)。場所のアイデンティティを構成するのは、物質的要素、人間の活動、そして(人間が与える)意味である。そこでは主観(マイクロ)レベルの個人の場所経験と、文化に基づく共同体(マクロ)レベルの場所のアイデンティティの間の葛藤や対立は想定されていない。

人間主義的地理学の「場所」論には、ラディカル地理学(マルクス主義地理学)とフェミニスト地理学からの批判がある。前者からは、主観的世界への傾倒と構造的要因の軽視が、後者からは、場所の本質化が男性中心的な視点であることが批判されてきた。

ローズは、『フェミニズムと地理学』の中で、「女性のための場所はない」と題して、人間主義的地理学が、場所の観念を男性中心的で、ロマン化、母性化、他者化された女性観にもとづいて構築していることを厳しく批判している。男性にとって癒しの場であり親密さの実現の場所である「ホーム」は、女性にとっては無償の家事労働と抑圧の場所にほかならない。人間主義的地理学では、場所は客観的・合理的な知(それらは男性の所有物)では理解できない他者として、神秘化され女性化される。ローズは、それを審美的男性中心主義と形容している(Rose 1993:60)。

マルクス主義地理学による人間主義的「場所」論批判の系譜の上に位置づけられるのが、ハーヴェイの議論である。『ポストモダニティの条件』(Harvey1992)において、ハーヴェイは、ポストモダンの本質を、ポストフォードイズム(フレキシブルな蓄積体制)への移行と、資本にとっての回転時間の加速化、情報通信技術の発展にともなう、グローバル資本主義による「時間-空間の圧縮」(time-space compression)の中に見出している。商品の消費からサービスの消費に移行し、移ろいやすさや、はかなさが主流となる中で、虚構、断片、コラージュや折衷主義に彩られた審美的なポストモダニズムの芸術や建築が、都市の建造環境と結びつきながら流通する。グローバル資本主義の特徴である生産過程の細分化と情報・通信・運輸技術の発展は、空間的障壁を減じる効果をもつ。しかし一方で空間(場所)の重要性が増すという逆説が生じる。「空間的障壁の重要性が弱まるにつれ、空間内における場所の多様性に資本はますます敏感になり、資本を引き付けようとする場所はますます自らを差異化しようとする」(Harvey 1992:296-297)からである。

もう一つの動きは、移りゆく世界の中でゆるぎない拠り所を求めて場所と結びついたアイデンティティに執着する人々の対抗運動である。ハーヴェイは、伝統の力に訴える場所の運動が、フレキシブルな資本主義がもたら

ず断片化や場所の美学と重なり合い、そこに包摂されてしまう危惧を示している(Harvey 1992:302-304)⁵⁾。

ハーヴェイの『ポストモダニティの条件』に対しては、フェミニスト地理学者からの異議申し立てがある(Deutsche 1991, Massey 1991)。二人の批判は、ハーヴェイが世界の真理を俯瞰する超越的な存在として、客観的、構造的な全体論を提示していることに向けられる。それはフェミニズム(そしてポストモダニズム)が提起してきた、表象の権力をめぐる問題や、状況づけられた知(Haraway 1991)、差異の持つ意味などの議論に彼が無頓着であることに集約される(『ポストモダニティの条件』に都市景観の写真と並んで女性の裸体の図像が多く登場することは、まなざす側としての男性の視線を象徴的に示している)。

このハーヴェイとフェミニスト地理学者の論争は、場所をめぐるハーヴェイとマッシーの論争、そしてグローバルな場所感覚をめぐるマッシーの議論に引き継がれる。ハーヴェイは、「場所」が社会的に構築されたものであり、空間の生産をめぐる資本や権力、階級を異にする住民の間に対立と競争が存在する中で、場所を守ることがしばしば強者の価値観に基づくものとなり、弱者が排除される—その結果、社会の分断を推し進めるものになってしまうことを懸念する(Harvey 1993)。

マッシーは、ハーヴェイの懸念は共有しつつも、閉鎖性や反動に陥らない、グローバルな場所感覚の構築を模索する(Massey 1993=加藤2002:訳語は筆者)。マッシーは、ハーヴェイは、変化の動因を資本と貨幣の力にしかみていないとし、空間と場所の体験は経済的要因だけによって決定されるものではないと主張する。そして時間-空間の圧縮には、その過程を主体的に行使する上での力の配列(たとえばジェット機に乗って国際会議を飛び回るエリートと、難民や移民、インナーシティの年金生活者、ランバダなどグローバル音楽を生み出しながら自らは中心街に行くことのないリオデジャネイロのファベラ住民の間)に著しい落差があることを指摘する(Massey 1993:62-63)。

場所観念の問題は、場所が単一の本質的なアイデンティティを持つという見方、また場所に境界を設けてしまうことに由来する。境界線を引くことは、そこに「内部」と「外部」、「われわれ」と「彼/女ら」という線引きと対立を作り出すことになるからである(Massey 1993:64)。

マッシーは、自らが長年住み愛着を持つロンドンのキルバーンという場所を素描する。そこは、ロンドンへの抜け道が車で混み合い、ヒースロー空港に発着する飛行機が低空で通過し、インド系の移民がサリーを売る店が

あったり、湾岸戦争で意気消沈するムスリム移民が（おそらく米英中心の多国籍軍の戦果を華々しく報じる）大衆紙サンを売る新聞雑貨店があったりする街である。キルバーンは、様々な人々が交錯し、単一のアイデンティティなど存在しえない場所である（Massey 1993:65）。

マッシーが提示するのは、場所のオルタナティブな解釈である。場所あるいはロカリティの固有性は、社会関係や社会過程、経験と理解が、ある地点とともに現前して、相互作用し、紡ぎ合わされることによってつくられる。そうした関係や経験や理解の大半は、その場所を越えたスケールでつくられたものである。場所意識はより大きな世界とつながっており、そこではグローバルとローカルが統合されている（Massey 1993:66）。

マッシーは進歩的な場所観念として、次の4つを挙げる。第1に、場所は静態的なものではなく、プロセスである。第2に、場所は閉じた領域を持たない。第3に、場所は単一で固有のアイデンティティを持たない。第4に、これらは、場所の重要性や固有性を否定するものではない。グローバル化の中で、より大きなまたよりローカルな社会関係が混ざり合う焦点として、それぞれの場所は特有なものであり続けるのである（Massey 1993:68）

グローバル化時代の場所を、開放的でダイナミックなものとして捉えかえそうというマッシーのこの主張は革新的で魅力的であり、現状における地理学の「場所」論の一つの到達点ともいえる。しかし、このマッシーの小論はあくまで素描に過ぎず、そこにはさまざまな限界や疑問も存在する。たとえば、現実にこのような流動的な場所をフィールドワークに根ざしてどう描き出すのか。また単一のアイデンティティや凝集性を持たない場所が、果たして権力や資本による再開発の波に翻弄されるだけではなく、抵抗の拠点ともなりうるのか。そして、「南」のローカルな場所においてもこうした開放性は実現しうるのだろうか。これらの問いに応えるのは、私たち自身の課題であろう。

V 「場所」の観念再考

最後にこれまでの議論を総括して、筆者なりの「場所」観念を提示して、結びにかえたい。

地理学の中で「場所」は、必ずしも明確な定義を与えられてこなかった。これは、場所が学問用語というより日常語であることが大きい（Cresswell 2004:1）クレスウェルによれば、「場所」とは「人々が意味のあるものとした空間」である（Cresswell 2004:7）。

人文地理学事典第5版では、「場所」(place)を次のように規定している。placeとは、地理的な場 (locale)

であり、地域 (area, region) や、位置 (location) と同様、その大きさや形状は問わない。それは地表の一部や既存の空間に改変を加えて人間が作り出したものである（Henderson 2009:539 - 541）。場所の特質として、第1に、場所(あるいは場所になること)は必ず意味を持つこと、第2に、場所が地理的な場となること、そして第3に、グローバルな場所意識をめぐる前述のマッシーらの議論が紹介されている。

第2の点については、場所が常に移り変わるものであることに加え、(アンリ・ルフェーブの)空間の生産の観念の導入以降、空間と場所という二項対立的な見方ではなく、場所が(生産された)空間のある特定の局面(moment)をさすようになったことなどが指摘された上で、「常に進行しつつある、地理的に結びつき、存在論的にも構成しあうような要素や関係の集合体」(Henderson 2009:540)として場所を捉えるという見方が示されている。これはダイナミックな場所の捉え方といえる。

前述のマッシーの議論もふまえ、私は次のようなものとして場所を定義したい。すなわち「場所」(place)とは、「空間的な近さによって生み出される人と人、人と事物、事物と事物の関係性の束」である。また同時に、上記の原理によって作り出された実体としての空間を指す。場所はもっぱらマイクロレベルの視点で捉えられるものであり、プロセスと考えたい。場所は人々のまなごしの対象となり、アイデンティティの基盤ともなるが、固定的な領域性は持たない。関係性としての場所とは、わたしたちの日常実践が展開される空間であり、その実践を規定し、またその実践によってつくられなおすところである。

たとえば「家族」は、場所を越えた観念的・規範的關係性であり、それ自体は空間を前提としていない。空間的・時間的に離れていても家族の一員であるという観念は存在しうる(都市で建設労働に従事する父、海外で家政婦として働く母、留学に行っている娘、亡くなった祖母も「家族」の一員でありうる)。これに対し、家庭/ホーム(home)は、基本的に「場所」(に根ざす関係性)である。そこにはシェルターとしての家屋があり、具体的な空間があり、そこに集い(あるいは脱けだし)、物理的かつ経済的に寝食を共にするメンバーがあり、何らかの共同性(ポジティブに評価するかネガティブに評価するかは別にして)が生起する。部屋の間取り、採光・通風、匂い、家具の配置…といった物質的要素は、そこに暮らすメンバーたちのホームへのあるいはメンバー相互の愛着や疎外や支配や協働や敵対に大きくかかわる。そのような意味でのホームは、人間にとっての原初的な場所の

ひとつである。家族の観念や関係性は、このホームと切り離しては考えられない。「家族」の紐帯や愛着や憎悪は、ホームという場所のありようによって規定される。

私が長年フィールドワークを行ってきたクラインビット村で寝起きしていたホストファミリーのアントンの家は、100平米以上ある仕切りのない住居に、20人を超える家族が寝泊まりしている。各自の個人空間と呼べるものは、寝るときの蚊帳の中と、成人については自らの私物を入れたパトロールボックスやスーツケース一つだけである。湖側に近い窓に面した隅に炉が置かれ、そこで一家の「主婦」を務めるローリンが家族のサゴを焼き、魚を茹でる。この家という場所に、人々は集い、語らい、食事をし、眠る。話し声や笑い声、時には夫のジャスティンが子供を叱る声が飛び交う。ここで食事を共にし、寝泊まりする人たちは、血縁関係のある「家族」ばかりではない。しばらく預かっている子供や、居候、自分の家を持たない老人などさまざまである。血縁や婚姻に基づく家族の原理からいえば、この家には複数の家族や家族以外のメンバーが集まって住んでいるともいえるが、むしろそれらのメンバーが家という場所を共有することで、「家族」が生成する（そして変化する）と言うほうが適切である。

わたしが1996年以来フィールドワークをしてきたのは、パプアニューギニアの大河セピック川の南部支流域にあたるブラックウォーター川とそれが作り出す氾濫原に面する村である。わたしは、1986年以来14回にわたって、クラインビット村に（ときには反撥しながらも）繰り返し通い続けてきた（熊谷2013）。それは、場所の力に惹かれてとしか言いようのないものだった。

場所とその生成の観念を用いて、ブラックウォーターという地域の地誌を具体的にどのように描くかという課題は、次稿に期したい。

注

1) コモンズの議論は、近年さまざまな視点から注目を集めている（多辺田2004、宮内編2006、ハーヴェイ2013）。ハーヴェイは、資本主義的都市化が社会的・政治的・生活的コモンズとしての都市を破壊し、私的に領有する（独占レントの獲得という形で）状況を描いている。しかし資本によるローカルな文化の領有という実践には、矛盾が存在する。グローバルな資本は、独占レントの追求の中で、地域に固有のローカルな特質を価値あるものとし、その中で場所の個性を作り出すような差異化の形態を支えなければならない。しかしそれは（その場所に）商品化と市場支配への対抗の空間を作り出す可能性を持っているからである（ハーヴェイ2013:186-190）。

2) メキシコの边境のチアパス州を拠点とするサバティスタ運動は、北米自由貿易協定（NAFTA）に対する先住民農民からの異議申し立てである点、边境にありながらインターネットを使って世界中に支援のネットワークを持っているという点で、グローバル化する現代を象徴する社会運動といえる（サバティスタ民族解放戦線1995）。

3) ただしラトゥーシュの書では、パプアニューギニアの「部族」へのステレオタイプ化された二つの挿話が物語るように、「南」の地域への具体的な想像力やリアリティは乏しい。

4) エスコバルの書の文献リストには、ギデンズやカステルの名前はあるが、管見の限り地理学者の著作はほとんど見いだされない（例外はAlan PredとオーストラリアのKatherine Gibsonだが、それも直接場所を論じた書ではない）。地理学における場所をめぐる新たな議論はふまえておらず、場所と地域が互換的に用いられている印象がある。

5) しかしハーヴェイは、すでに述べたように近著『反乱する都市』（Harvey 2012）においては、対抗運動としての「都市への権利」を提示し、都市コモンズを市民の手に取り返す（都市を「コモン化」する）実践を唱道しており、その立場はシフトしているように感じる。

文献

- エステバ、グスタボ 1996. 開発. ザックス編 17-41.
- カステル, M. 著 大沢善信訳1999. 『都市・情報・グローバル経済』青木書店.
- グロネマイアー, マリアンネ 1996. 援助. ザックス編 82-103.
- サバティスタ民族解放戦線著, 太田昌国・小林致広訳 1995. 『もう、たくさんだ！—メキシコ先住民蜂起の記録』現代企画室.
- 熊谷圭知 (2013) かかわりとしてのフィールドワーク—パプアニューギニアでの試行錯誤的实践から. *E-journal GEO*8(1) : 15-33.
- 熊沢 誠2007. 『格差社会日本で働くということ—雇用と労働のゆくえをみつめて—』岩波書店.
- ザックス, ヴォルフガング編, 三浦清隆ほか訳1996. 『脱「開発」の時代—現代社会を解読するキーワード辞典』晶文社.
- 武田敦2009. 闘うための、闘わないでいい居場所づくり. 湯浅誠・富樫匡孝・上間陽子・仁平典宏編著『若者と貧困—いま、ここからの希望を』明石書店. 248-268
- 多辺田政弘2004. なぜ今「コモンズ」なのか. 室田武・三俣学『入会林野とコモンズ』日本評論社.
- 玉野井芳郎・清成忠雄・中村尚司編 1978. 『地域主義—新しい思潮と実践への試み』学陽書房.
- 鶴見和子・川田 侃編1989. 『内発的発展論』東京大学出版会.
- 中野佳裕2010. 「日本語版解説 セルジュ・ラトゥーシュの思想

- 圏について」ラトゥーシュ著, 277 - 338
- 西川潤・生活政策研究所編 2007. 『連帯経済—グローバル化への対案』明石書店.
- ネグリ, アントニオ・ハート, マイケル著, 水島一憲ほか訳2003. 『帝国—グローバル化の政界秩序とマルチチュードの可能性』以文社.
- ハーシュマン, アルバート・0, 矢野修一・宮田剛志・武井泉訳 2008. 『連帯経済の可能性—ラテンアメリカにおける草の根の経験』法政大学出版局.
- 藤森克彦 2010. 『単身急増社会の衝撃』日本経済出版社.
- ホックシールド, A.R. 著, 石川准・室伏亜希訳2000. 『管理される心—感情が商品になるとき』世界思想社.
- 宮内泰介編2010. 『コモンズを支えるしくみ—レジティマシーの環境社会学』
- モヨ, ダンピサ 著, 小浜裕久 訳 2010. 『援助じゃアフリカは発展しない』東洋経済新報社.
- 安田浩一 2012. 『ネットと愛国—在特会の「闇」を追いかけて』講談社.
- 湯浅 誠 2007. 『貧困襲来』山吹書店.
- 結城登美男2009. 『地元学からの出発』農山漁村文化協会.
- 吉本哲郎2008. 『地元学をはじめよう』岩波書店.
- ラトゥーシュ, セルジュ著, 中野佳裕訳2010. 『経済成長なき社会発展は可能か?—〈脱成長〉と〈ポスト開発〉の経済学』作品社.
- リッツア, ジョージ著, 正岡寛治監訳 (2005) 『無のグローバル化—拡大する消費社会と「存在」の喪失』明石書店)
- レルフ, エドワード著, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳. 1991 =1999 『場所の現象学—没場所性を越えて』筑摩書房.
- Auge, M. 1995. *Non-Places: An Introduction to Supermodernity*. Verso.
- Cresswell, T. 2004. *Place: A Short Introduction*, Oxford, Blackwell.
- Deutsche, R. 1991. Boys town, *Environment and Planning D: Society and Space* 9:5-30.
- Escobar, A. 1995. *Encountering Development*. Princeton Univ. press.
- Escobar, A. 2008. *Territories of Difference: Place, Movements, Life, Redes*, Durham, Duke Univ. Press.
- Giddens, A. 1990. *The Consequences of Modernity*. (ギデンズ, アンソニー 著, 松尾精文・小幡正敏訳 1993. 『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』而立書房.)
- Harvey, D. 1992. *The Conditions of Post modernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Oxford, Blackwell. (ハーヴェイ, デヴィッド著, 吉原直樹監訳 (1999) 『ポストモダニティの条件』青木書店.)
- Harvey, D. 1993. From space to place and back again: reflections on the conditions of post-modernity. In Bird, J. et al. eds. *Mapping the Futures: Local Cultures, Global Change*. Routledge:3-29.
- Harvey, D. 2012. *Rebel Cities: From the Right to the City to the Urban Revolution*. London, Verso. (ハーヴェイ, デヴィッド著, 森田成也ほか訳『反乱する都市—資本のアーバナイズーションと都市の再創造』作品社.)
- Haraway, D. J. 1991. *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*, London, Free Association Books. (ハラウェイ, ダナ著, 高橋さきの訳2000 『猿と女とサイボーグ—自然の再発明』青土社.)
- Henderson, George 2009. Place. In Gregory, D. et al eds. *Dictionary of Human Geography. the 5th edition*. Wiley-Blackwell. 539-541.
- Massey, D. 1991. Flexible sexism. *Environment and Planning D: Society and Space* 9:31-57.
- Massey, D. 1993. Power-geography and progressive sense of place. In Bird, J. et al. eds. *Mapping the Futures: Local Cultures, Global Change*. Routledge: 59-69. (マッシー, ドリーン著, 加藤政洋訳. 2002. 権力の幾何学と進歩的な場所感覚. 思想933 : 32-44.)
- Rose, G. 1993. *Feminism and Geography: The Limits of Geographical Knowledge*. Cambridge, Polity Press. (ローズ, ジリアン著, 吉田容子ほか訳『フェミニズムと地理学—地理学的知の限界』地人書房.)

くまがい・けいち

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

Rethinking on “Place”: A Note for Regional Geography of Not-Othering

Keichi Kumagai (Humanities and Sciences, Ochanomizu University)